

火が出たのは師走の二十八日の夜、伊丹屋の誰もがぐっすり眠っている時刻だった。折悪しく北風の強い夜で、しかもここ十日というもの一滴の雨も降っていないかった。もしも、火元の仏間に近いところで寝起きている番頭の藤兵衛が眠りの浅い体質でなく、かすかな煙の匂いに気づいて飛び起きていなかったなら、新年を三日後に控えた寒空の下で、伊丹屋の全員が野晒しにあうところだった。

おとよは台所のすぐ裏手、土蔵の脇に建増しされた奉公人たちのための座敷で、おかつとふたり枕を並べていた。火事だ！ という大声におとよは寢床から跳ね起きたが、おかつのほうはゆすぶって起こしてもまだ寝ぼけ顔という有様だった。近在の親元からひとり江戸へ出てきて、先月奉公にあがったばかりで年齢もまだ十二とはいえ、万事において気働きのないこの娘にいいかげん焦れてきていたおとよは、思わず、

「勝手に焼け死んじまいな！」と怒鳴りつけておいて廊下へ走り出た。

古着を何枚か包んだふるしき包みひとつを担いで江戸へ奉公に出てきて三十年、これまでも、おとよは何度か火事を見てきた。火の粉をかぶつてもきた。だが、それらの火事はみ

な半鐘の音から始まったもの、つまりは外から襲ってきたものだ。伊丹屋での奉公の年月の長さでいったらおとよの次、日ごろいちばん頼りにしている藤兵衛の聲が火事を報せるなど、この伊丹屋が火元になるなど、おとよには夢にも思わなかったことだった。

火事の恐ろしさよりも、そのことのほうがおとよを震えあがらせた。なんてことだい、お天道さまに顔向けできやしない、あたしのこの伊丹屋が火を出さなんて。

勢いあまって左右の壁にどしんばたんとぶつかりながら、おとよは藤兵衛の声のする方向へ走った。ほかの奉公人たちも飛び出してくる。そして、仏間にかけてつけた面々の頭上で、ぱちぱちとはぜるような音をたててもえあがっているものを見つけたとき、おとよは、口があきっぱなしになってしまうほどに驚いた。そこではとんでもないことが起こっていた。

燃えているのは、神棚だった。

伊丹屋は、新川の一带に軒を並べる酒問屋のなかでは、さほど古い歴史を持つ店ではない。日本橋川と大川にはさまれたこの堀割を、上方からの下り酒が船に揺られて江戸に荷揚げされるようになったのは、おとよなどにとってははるかに昔、明暦の振袖火事のころからのことだそうだが、その当時には、のちに伊丹屋を興すことになる先々代の旦那さまは、まだ江戸の地を踏むこともなく、遠く伊丹の地のどこかで畑を耕していた。伊丹屋が一人前の顔をしてこの地にお店を張り土蔵を建てることができたら、たかだか四十年ほどしか経っていない。

だがそれは、逆に言えば、たかだか四十年のあいだに、伊丹屋がそれだけのして、きたというところもある。酒問屋の組合は結束が堅く、元禄のころからがっちりと横に手を繋ぎ、独自の序列や力関係をつくって互いの商売を支えあつてきた。そういうなかに成り上がり者が割り込んでゆくには、理屈抜きの苦勞がある。町屋のなかにまじつた八百屋や魚屋のように、商いだけ上手にしていればいいというものではない。木場の川並が角材の上を渡つてゆくと、きのような、微妙な技術やよく見える目や、ものの動きを計る敏感な秤が要るのだった。

こうした苦勞の積み重ねで、伊丹屋はお店を大きくしてきた。そしてその道中のかんりの部分を、おとよはいっしょに歩んできた。がんばらない子供の身で女中奉公にあがつた日から、女中頭として若い娘たちを使うようになった今日まで、おとよはずっと伊丹屋のなかで生きてきた。毎年暮れも間近になると、新川をのぼつてくるはしけ船から、灘や伊丹からの下り酒が着いたことを報せる男衆の威勢のいい声が聞こえてくる。おとよは奉公に勤めながら、早着きを争うそれらの声を、年毎に誇らしく聞くことができることに、そのことだけに喜びを感じて暮らしてきた。

その伊丹屋が火を出したなどといったら、これまでの苦勞は水の泡だ。酒問屋組合のお年寄り衆は、新川一帯の土蔵に眠る無数の富士見酒を、不粋な煙でいぶしてしまいかねない失態をおかした伊丹屋を、終生、許してはくれないだろう。それだから、火元が神棚で、仏間の天井を焦がしただけで消し止めることができたというのは、これ以上ないほど幸運なことだった。

「まあ、おおごにならなくてよかつたとは、私も思うんだけども……」

歯切れの悪い言い方をして、藤兵衛が瘦せた腕を組んでいる。氣つ風と威勢のよさが売り物の男衆たちとは違い、藤兵衛はそろばんひとつでここまで来た男だ。二十数人の大所帯を切り回し、力仕事もこなすおとよの太い腕でんと突かれたら、ふつとんでしまいそうな貧弱な体格である。

「思っただけども、なんですか」

小火の翌朝、朝飯が済んで一段落したところで、子細ありげな顔をしてやつてきた藤兵衛が、おとよを井戸端に呼び出した。そして、なんとも言いにくそうにもごもご咬んでいるのである。

この番頭とは長い付き合いだ。こんな様子をしているときには、何か大事な話、それもおとよにしか話せないことを話そうとしているのだとわかる。

三十年前、古着を包んだ風呂敷包みひとつを背負つて伊丹屋にやつてきたおとよと同じく、藤兵衛もまた、身ひとつの丁稚奉公を振り出しに、先代の旦那さまにお仕えしてきた。五年前に先代が亡くなり、何かと先代と折り合いの悪かつた今の旦那さまがあとをとつたときには、藤兵衛はお暇をもらうのではないかという噂がしきりとあつたのに、涼しい顔で何事もなかつたかのように、今もつとめている。

この男もあたしと同じように、伊丹屋の骨なのだ、おとよは思う。旦那さまが代わろうと、どんな女が嫁に来てお内儀さんにおさまろうと係わりはない。あたしたちはこの伊丹屋

に奉公しているのだから。

「実は、小火のあとを片付けていて、妙な物を見つけたんだがね」

藤兵衛はおとよを手招きし、井戸端の先の、薪たきぎや焚たきつけを積んである裏庭へと歩いていった。そこで薪の山の脇に身を屈かめ、懐ふところから紙に包んだ細長いものを取り出した。

紙の端からしつぽがのぞいていたので、おとよにもそれが何だかすぐにわかった。注連縄しめなわである。

「燃え残りですか」

「半分ばかりな。早くに水をかけたから」

藤兵衛は紙包みを開き、おとよにそれを見せた。全体に黒く煤すすけ、水で湿った注連縄の燃え残りが出てきた。端のほうがざんばらになり、今にもほどけそうだ。

「お内儀さんに、不吉だから神社に持って行って燃やしてもらってくれと言われたんだがね」

藤兵衛のような忙しい番頭をつかまえてそういうことを頼むのは、いかにもお内儀さんらしいとおとよは思った。お嬢さん育ちで、商人の家のことなど何もわからない人なのである。嫁いできて三年になるが、まだ子供こどももないし舅しゅうと 姑めいともない身分なので、正月まであと三日というところになって、晴れ着の心配ぐらいしかすることができない娘さんのままでいる。

「ここを見てごらん」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。